
survival online

ああああ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

survival online

【Nコード】

N1260BA

【作者名】

ああああ

【あらすじ】

ログアウト不能のVRMMOのなかに閉じ込められたプレイヤーたち。

フィールドを徘徊するモンスターはあまりに強く、プレイヤー達はなすすべもなく殺されていく。

PKがほとんど唯一の育成手段だと気づいた主人公はサブキャラクターのレオンとなって自分の手を汚しながらもゲームクリアのための強さを身につけていく

序（前書き）

ネットゲームをやったことがないので、間違いがたくさんあると思いますが、不自然な点があれば随時修正していきたいと思います。中だるみしないように気をつけたいと思います。

更新は一ヶ月に一度くらい。

ゲームのDarkSouls、小説のSAOなどを参考に使っています。

序

序章

本物の日の光を見たのは、もうだいぶ前のことだが、ログインすれば、俺の前にはいつでも鮮やかな緑と澄み切った空が現れる。

俺はグラフィックで描かれた木々の緑や、輝く海、白い太陽の光のほうに綺麗だと思う。

ゲームは進化するにつれて、どんどんリアルさを増していき、理想的な世界が完成されつつある。

そりゃ、ネットゲ中毒にもなるってもんだ。ここは現実よりはるかにマシな世界だから。

俺は今日の12:00から開始される `survival online` のキャラメイクを仕上げにかかっていた。

初日に乗り遅れないようSOではキャラクターの作成までは前日にできるようになっているのだ。

もっとも、俺は テストのキャラクターをそのまま使っつもりだったから、もとより乗り遅れる心配などなかったのだが。

今、俺の前に浮かんでいるのはガツチリした体格の大男だ。一見しただけで盾職とわかる、筋骨隆々で鎧の似合うキャラクターだ。

ハンドルネームは鉄血。鉄の血が流れているようなタフガイを目指しているからだ。

最初は映画から取るうと思っていたが、あまり格好つけすぎると仲間茶化される。

外見に関してのみBテストからの引き継ぎが可能なため、メイクは楽に終わった。配色の細かい部分をいくつか変更して「決定」を押す。

すると、続けてサブキャラクターを作成しますか？ という問いが画面中央に表れた。

サブキャラが作れるのか？ 前回にはなかったシステムだ。俺は疑問に思いつつ、YESを選択。作れるなら作っておいて損はない。

二つのキャラを同時に育てようと思ったら、その分時間も金もかかる。

だが、ゲームをより長く楽しむためには複数のキャラがいたほうが良いこともある。ときには人間関係がこじれることもあるからな。キャラクターの作成は入力事項が多く、手間がかかるから敬遠する奴もいるだろうが、俺はゲームのこういったところも好きだから何の問題もない。

さて、まずネームだが、どうせサブだからと適当に決めることにした。名前はレオン。職業は前回選ばなかった魔剣士にした。

魔剣士とは攻撃力に特化した戦士系ジョブだが、装甲が紙すぎて使い勝手が悪かった。

人気はやはり盾が装備できる騎士と、回復のできる治癒術士。極めれば黒魔術師が最強という噂だが、あくまで噂に過ぎない。

俺はソロでやるつもりはないから、メインは騎士にこだわったが、サブなら色物のジョブを選んでもいいだろう。

外見もメインとはほぼ正反対の貧弱な体型にした。手足が細く、背も小さい頼りない姿。いわば現実の自分に近い姿だ。

我ながら、どうしてこんな身なりにしたのか疑問なくらいだが、すべて適当に決めていたら自然とこうなってしまった。

まあ、いい。開始までもうすぐだ。俺はサブキャラクターの作成を決定を押しして終了した。

現在の時刻、11:55。まもなくsurvival onlineがスタートする。

青白い光が周囲を取り囲むように舞っている。

光の乱舞が終わったとき、俺は始まりの街ヴァネサリアの街角に立っていた。

まずは周囲を見渡して、状況を確認。 12:00きっかりにログインした人々で街が溢れかえっている。

次々と光が生まれ、人々がこの世界へと降り立ってくる。

ほとんどの人は、この世界のあまりのリアルさに言葉を失っているようだ。無理もない。俺もBテストのときはそうだった。

現実と比べても遜色ない、まるで映画のなかに入り込んだようになりアルな光景。

匂いや味を感じることはできないが、攻撃を食らった時の衝撃やクリティカルを出した時の手応えなどは今までのゲームをはるかに超越している。

だからきつと、この街で呆然としている人たちは、フィールドに出たらもつと驚くことになるだろう。

俺の方かというと、この状況でやることと言えばただ一つ。フレンドリストの画面を出して、仲間と連絡を取り合う。

Bテストよりも以前から、他所の会社のオンラインゲームで知り合った連中だ。

今回も経験を買われてぜひ、ギルマスになってくれと言われている。俺はズラズラと名前がならぶリストをスクロールしてひとつの名前を見つめる。その名もビスマルク。

こいつとは、7年近い付き合いになる。俺の右腕、というのも変か。俺の部下ではなくて、対等な立場だからな。

今回もギルド作りに力を貸してもらおうと思って真っ先に連絡することにした。

『こちらビスマルク』

いかにも頼れる男といった感じの低くて落ち着きのある声が耳元で聞こえてくる。

顔の見えないネットゲームで何人もの女性プレイヤーを虜にしているだけのことはある、いい声だ。

ネットと現実とで、きちんと分別を付けられる男なのでギルドの間関係を壊すこともない。立ち回りの上手い男なのだ。憎いくらいに。

「こちら鉄血。遅れずにログインできたみたいだな。ようやく、本格的に組めるな」

『久しぶりだな、鉄血。マリーナたちへの連絡はまだだろ。手分けしてやるう』

「ああ、頼む。みんなには噴水広場へ集まるよう言ってくれ」
『わかった』

手短な要件を伝え、俺はすぐに残りのメンバーに連絡を取り始めた。まず集めるのはパーティーメンバーの5人。

ハンターのSEGA

黒魔術士のビスマルクと@てんこ

治癒術士のマリーナ

俺と同じく前衛を受け持つ騎士の雷光

Bテストの時から、この編成で行こうと打合せしてあったので、会わなくてもメンバーがそれぞれなんの職についているかは分かっている。

火力不足の編成だが、パーティーの練度はSOでもトップクラスのはずだ。

魔剣士がいれば火力を補えるが、あのHPの低さは治癒術士一人ではカヴァーしきれない。

一応、この編成のこともあって俺はサブキャラクターを魔剣士にしたのだが、サブキャラクターが作成できるのを知ったのは、ついさつきだから、みんながサブに何を選んだのかはまだ知らなかった。さっきの電話でビスマルクに聞いておけば良かったか。

PTメンバーと連絡を取りつつ噴水広場へ向かうと向こう側から一人の少女が駆け寄ってくるのが見えた。

金髪ネコミミの小柄な少女。NPCのリリムだ。

男性プレイヤーに狙いを絞ったとしか思えない完全な萌えキャラで、男キャラであれば誰でもおにーちゃん呼ばわりしてくるビツチだ。

ミーナは俺が話し中と見て、間近で話し終えるのを待っていてくれる。前日もチュートリアルの説明役だった。

甘えるような上目遣いとせわしなく動くネコミミ尻尾を眺めながら残りのメンバーへの連絡を終えると待ちかねたようにリリムが話しかけてきた。

「おにーちゃん、よかったらリリムが街のなかを案内するにゃん」

リリムは人気のNPCだが操作の仕方は把握しているため、チュートリアルは飛ばすことにした。

「いや、いいよ」

「戦い方の説明をするにゃ？」

「いらない」

「じゃあ、最後にリリムから重要なお知らせをするにゃ」

「お知らせ？ なんだ？」

前回はたしかそんなことを言われなかったはずだから、今回の本格始動に向けてセリフが追加されたのだろう。

俺が首を傾げるとNPCは説明を続けてきた。

「実はこのゲーム、クリアするまでログアウトできないのにゃ。しかも殺されたらその時点でゲームオーバーなのにゃ。現実のおにーちゃんも死んじゃうから頑張って生き残るのにゃ。ほかに聞きたいことはあるかにゃ？」

は？ なんだって？ こいつ今、変なことを言ったよな。

混乱する俺の耳に、別の方角から怒鳴り声が聞こえてきた。

「ふざけてんのか！ おい、ログアウトさせろっ、クレームつけんぞ！」

見ればそいつは見えない何かに向かって怒鳴りつけていた。アイツもリリムから今の説明を受けたのだろっか。だとしたら俺の聞き違いではなかったのか？

俺は目の前のリリムに聞き返そうとしてやめた。常識的に考えればログアウトできないゲームなんて運営会社が作るわけがない。そんな違法なことをしても金にならないからだ。だからまずはログアウトができるか確かめることにした。メニュー画面を呼び出し、無事に表れた「ログアウト」の表示を見て安堵する。

「ま、あたりまえか」

言いつつ、虚空に表示されたパネルのボタンをクリックする。すると、耳障りな警告音とともに『ログアウトはできません』というメッセージが表示された。

「は？ 嘘だろ。なんでだよ」

俺は思わず声を荒げながら何度もログアウトボタンを押し続ける。だが、その度に警告音に跳ね返される。

本当にログアウトできないのか？

冷たい汗が頬を伝い、背筋を悪寒が這い上がる。立っていることさえできず、いつの間にか地面にへたり込んでいた。

「おい、鉄血っ。しつかりしろ。こんな時こそしつかりしてくれよ」いきなり、すぐそばで呼びかけられて俺ははっと顔を起こした。見れば、今までに見たこともない形相でこちらを睨んでいるビスマルクがいた。

いつの間にか近くまで集まってきたらしい。

そうだ、俺には仲間がいるんだった。ビスマルクの顔が強ばっているのは現状を受け入れつつあるからこそだろう。

「みんな、揃ってるのか？」

「ああ、揃いも揃って閉じ込められたみたいだ」

ビスマルクの横に立っていた甲冑姿の男、雷光がいう。

「ねえ、死ぬっていうのもホントなの？ やばいよ、これ」

「とにかく、今はみんな混乱してる。下手に動くべきじゃないのは確かだな」

マリーナと@てんこが二人で話し合っていた。確かに、今の段階でうかつな行動はできないか。

「いや、逆か・・・」

「鉄血？」

マリーナが腰を下ろし、俺の表情を覗き込んでくる。俺は立ち上がって言った。

「今フィールドにでないと完全に出遅れる。すぐにレベルを上げるべきだ。リソースの奪い合いになる」

「でも、やられたら本当に死ぬかもしれないんだぜ」

「みんなサブキャラクターは作ったか？」

俺が尋ねるとメンバー達はすぐにはっとした表情になった。

「おれは治癒術士にした」

ハンターになる予定だったSEGAが言う。

「回復と盾を増やそう。ビスマルクとてんこは？」

「スマン、俺のサブはブラックスミスなんだ」

ビスマルクが申し訳なさそうにいう。もうひとりの黒魔術師である

@てんこは幸い騎士を選択していた。

「俺はサブに魔剣士を選んでるけど、安定して狩れるようになるまで地道に騎士の攻撃とビスマルクの魔法で倒していくしかない」

「でもハンターのスキルが使えるくなるけどいいのか？」

サブキャラクターにはいつでも転身できるらしい。騎士を3人に回復2人、黒魔術師がビスマルク一人という編成だ。

「序盤はハンターのスキルもあまり役に立たない。確実に安全な方をとりたい」

「わかった、ちょっと待っていてくれ」

そういうと@てんことSEGAは姿を消した。そしてすぐに別の姿になって現れる。

@てんこのほうは可愛い女の子の姿になり、SEGAは外見にほと

んど違いはなかった。

「で、まずは森か？」

「ああ、その前に盾の良いやつとポーションを買おう。何が必要になるか分からないから、まずは必要な分だけだ」

そこまで決めたあと俺は皆の顔を順番に見つめた。

「なあ、鉄血」ビスマルクが言った。

「なんだ？」

「やっぱ頼りになるよ、お前。リーダーに選んで正解だった」

「はは、こつちこそいつも助けられてるよ」

こうして、俺たちは他のパーティーよりもひと足先にフィールドへ出ていくことにした。

盾は思った以上に高価だった。そこで1枚だけ良いのを買い、残り2枚はモブを狩ってから手に入れることにした。

初期装備の盾が防御力8なのに対して、新しく買ったウッドシールド倍の防御力がある。

とりあえずリーダーの俺が装備させてもらい、その代わり積極的に敵のターゲットを引き受ける。

始まりの街ヴァネサリアから街道を通って森へ向かった俺たちは早速一匹のモンスターに遭遇した。

ただのゴーレムだ。防御力は高いが初級のモンスターだ。Bテストでの経験の蓄積があるから何も恐れる必要はない。

「行くぞ！」

激を飛ばし、まずは俺が正面から切り込む。ゴーレムは動きが遅い。必ず先手を取れる。振り下ろした俺の剣は甲高い音を響かせて宙空に弾かれた。

「な・・・」

「来るぞ、攻撃！」

呆然としている余裕はなかった。弾き飛ばされた剣は追わず、まずは相手の攻撃を盾で受け止める。瞬間、とてつもない圧力が背骨から突き抜けた。

「くはっ」

完璧に盾で受け止めたはずの拳。だが、HPの半分近くまでが削られてしまっている。その上、攻撃を防いでいる今もじりじりとHPが削られている。

HPと防御力の高い騎士ですら、これなのだ。ほかの職業なら確実に一撃で沈む。

俺が盾で受け止めている間にビスマルクが魔法を放つ。直撃。だが、ゴーレムのHPは1ドットも減っていなかった。全くのノーダメージ

ジだ。

物理攻撃も同様、俺の剣をあっさり弾き返したのと同じように騎士二人がかりの攻撃もまるでダメージを与えられない。

「ちくしょうっ。なんだよ、このゲームっ。本気で俺たちを殺す気じゃねえか」

雷光が吠える。その剣は傷一つ付けられないまま刃こぼれしている。こんなはずはなかった。ゴーレムなんてソロでも十分倒せるはずだ。回復魔法の光が俺の体を包む。俺のHPは盾の上から削られたため、0になる寸前だった。一秒でも回復が遅れていたら死んでいた。

「撤退だ。こいつはおかしい。てんこ、雷光、一発だけ防いだらすぐに交代してくれ、マリーナ、回復すぐだ！」

声を枯らすように叫んだ、次の瞬間、咆哮を上げたゴーレムの一撃が全てを叩き潰した。

メキメキと大木をなぎ倒すような音を響かせて前衛の二人が潰れる。水風船が割れるようにあっけなく血飛沫が弾け飛んだ。

呆然とする俺に向かってゴーレムの腕が振り上げられる。

「鉄血、盾で防げ！」

ビスマルクの叫び声と同時に俺の身に緑色のエフェクトがかかる。

シールド強化の支援魔法。ビスマルクだ。

それでも受け止めた攻撃は容赦なく俺のHPを削っていく。ダメだ。騎士は足が遅い。魔法も詠唱している間は足が止まる。逃げる事ができなければ死ぬしかない。

唯一、逃げれるはずのビスマルクも魔法発動後の硬直時間で動きが止まっている。

戦意を喪失した俺に再び回復魔法がかけられるがなんの意味もない。俺はすでに敵のターゲットをとることすらできなかった。

俺の脇を通り抜けていったゴーレムに仲間が潰されていく。ぐちゃっ、という音が三つ。振り返れば俺はフィールドにたった一人で取り残されていた。

ゴーレムがゆっくりと振り返る。もう終わりだ。

俺は泣いていた。全身が萎縮して歯の根が合わない。ゴーレムが重い足をじりじりと引きながら迫ってくる。

逃げる！ 逃げる！

本能が警告を発する。

「うわあああああー」

剣も、盾も、とつくに放り投げていた。必死に街に逃げ込む。俺はただひたすらにモンスターと出くわさないことだけを祈っていた。

始まりの街ヴァネサリア。

その門をくぐり抜けた直後、俺は意識を失って倒れていた。

近くで様子を窺っていたプレイヤーが俺を介抱してくれたらしい。

目が覚めるとすぐに周りをプレイヤー達に囲まれ、質問攻めにされた。

「全滅だった。盾で防いでも上から持ってかれる。倒せるわけない」

「そんな、」

「ちくしょう、なんだよそれよお！ おかしいじゃねえか・・・」

怒りの声すら尻すぼみに消えていく。絶望が俺たちすべてを覆っていた。

「ログアウトできないどころか、この街から出ることもできねえのかよ。クリアなんて無理じゃねえか」

それから約ひと月。

街はずいぶん様変わりしていた。外から出られなければ人は街中に溜まるしかない。

人が多くなればなるほど争いも増え、あちこちでトラブルが起きた。手がかりを求めて決死の覚悟で街の外へ出る奴もいたが生還率ごくわずかだ。

運営のやっていることは犯罪であることに間違いはないのだ。遅かれ早かれ、救出されるに違いない。

無理にクリアに向かう必要はないのだと皆、諦めかけている。

NPCのリリムだけが俺たちに救出の望みはないのだと告げてくる。聞こえてくる情報もひどい話ばかりだ。盾職である騎士は初めのうちこそ、あちこちのPTから誘いを受けたが、フィールド上で戦闘が始まると敵の強さに絶望した後衛たちが真っ先に逃げ出してしまい、足の遅い騎士たちは敵の真正面に取り残された。騎士の死亡率はダントツだ。足がない分、同じ戦士系のハンターや魔剣士と比べても、生還率は桁違いだ。

騎士の連中はもう誰も信用しなくなっている。

掲示板にはわずかずつだが、モブの情報が蓄積しつつある。

俺が戦ったゴレムはウツドシールド装備か、黒魔法のシールド強化で一撃死を防げる。ただしガード不可の特殊攻撃がある。

その他に即死攻撃を持つキラービー。AGIが高いため、ほとんどの攻撃を躲す。

キラービーは現状、もっとも倒せそうなモブだが、すぐに仲間を呼ぶ習性があるため、囲まれたら全滅は必至だ。

ゴブリンは必ず群れで行動する。ダメージは通るが再生能力が半端ない。範囲攻撃のブレスを食らうと麻痺、猛毒、失明、沈黙、混乱の状態異常になる。

HPの弱い敵から攻撃していく習性があるため治癒術士が殺られまくっている。

集まっている情報はこれだけだ。なにしろ生還率が低すぎる。

情報のほとんどは別のPTを偵察していたか、仲間を置き去りにして逃げた奴が持ち帰ったもので言ってみれば汚れた戦果だ。

掲示板には名前が出るが、街では見かけたことのない名前ばかりで、おそらくサブキャラクターの名前で書き込みしているのだろう。

この一ヶ月の間に俺は何度フレンドリストを見返しただろう。

戦死者の名前は灰色で薄く表示され、真ん中に赤線が一本引かれている。ひと月たった今では半数近くの名前が赤で消されている。

つまりBテストで知り合った古参のメンバーが次々命を落としてい

るということだ。右も左も分からない初心者を残して。そうしたなか、俺はひとつの迷いを抱えていた。

ライバルギルドのリーダーだった謙信からの誘いがあったのだ。一緒にギルドを組まないかと。

謙信は、全ジョブ中最速のAGIを持っているハンター達に呼びかけ、偵察隊を組織してモブ情報を集めていた。ハンターはクリアーにさえ追われなければ情報を収集し、逃げ帰って来れる。

確かに今できるなかで、もっとも有効な対策なのかもしれない。

俺は謙信にコールしてみることにした。すると、すぐに返事が返ってくる。

「謙信か。例のモブ討伐の件なんだけど」

謙信の提案はボス攻略と同じ方法でモブを倒そうというものだった。3PT、18人のメンバーで一匹のモブを攻略すれば倒せるかもしれない。

これはそういうゲームなのではないか、と謙信は考えているらしかった。

『覚悟は決まったか』

「ああ、やるっ」

2 (後書き)

仲間が全滅した割にドライな主人公ですが、ウジウジしていると話が
進まないのとおりあえずこのままいきます。

一ヶ月くらいはショックで引きこもっていたというところで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1260ba/>

survival online

2012年1月3日01時45分発行